

「罪の赦し」

ヨハネによる福音書 8:1-11

今日の聖書の箇所は、イエスさまが朝早く、エルサレムの神殿の境内に入られた時のことです。このエルサレムには、イエスさまに敵対する祭司や律法学者、ファリサイ派の人たちが大勢いて、イエスさまの命を狙っていましたが、イエスさまの教えに共感し、み言葉を聴くために集まってくる人たちも少なからずおりました。そのイエスさまの教えを待ち望んでいた人たちは、早朝にもかかわらず、イエスさまの周りに集まって来て、主のみ言葉を耳を傾けたのです。静かな早朝、神殿の境内でイエスさまから神のみ言葉を聴くそのひと時は、心が洗われるような聖なる時であったと思います。

その静かな聖なる礼拝の場に、どやどやと律法学者たちやファリサイ派の人々が入り込んできたのです。見ると、一人の女性を引きずるようにして連れて来て、イエスさまの居られる真ん中に立たせて、イエスにこう言ったのです。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女を石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」(4-5節)と。

「場をわきまえない」とはこういうことです。なにも大勢の人々が、神の教えを静かに聴いている礼拝のような場で、このような質問をしなくてもよさそうなものですが、そのような妨害こそが、この律法学者やファリサイ派の人々の意図であったのです。彼らも、神に仕え、「律法」という神の教えを守り伝える人々です。たとえ、理解の相違、立場の違いがあったとしても、ユダヤたち人から「ラビ(先生)」と呼ばれているような彼らが、そこまでしなければならぬのか、と思わされます。

相手に対する敵意や憎しみは、しばしば冷静な判断力を失わせ、相手への理解を妨げると共に、自分自身をも見失ってしまうことがあるものです。価値観が多様化し、さまざまな考え方や意見の違いがぶつかり合う中であって、私たちはお互いの違いを認め合い、相手を尊重し、その違いを敵意や憎しみに変えることのないように、冷静に対処しなければならないことを思わされます。

この律法学者やファリサイ派の人々のイエスさまに対する問いは、質問ではなく、イエスを困らせ、イエスを訴える口実を得るための「罠(わな)」でした。「姦通」とは、前の口語聖書では「姦淫」と訳され、新しく出た聖書協会訳の聖書も「姦淫」と訳されていますが、要するに男女の不正な不倫関係のことです。モーセの「十戒」には、「姦淫してはならない」(出エジプト 20:13)と固く戒められ、レビ記や申命記では、姦淫の罪を犯した男女は、共に石打ちの刑に値すると厳しく咎められていたことでした。

律法学者やファリサイ派の人々は、その姦淫の現場を取り押さえたという女性を連

れて来てみんなの前に立たせて、イエスに問うたのです。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうか考えるか」と。モーセが律法の中で定めているのは、姦淫の罪を犯した男女双方に対する裁きです。律法学者やファリサイ派の人々が、女性の方だけを捕らえて「どう裁くべきか」と問うのは、明らかに律法に反することです。これは彼らの男尊女卑の人間的な判断によるもので、彼らの意図が、律法に基づく公正な裁きを求めていたのではないことを示しています。彼らの意図は、あくまでも「イエスを訴える口実を得る」ことが目的であったのです。

この問いが、イエスを陥れる罠であったのは、当時、ユダヤの「石打ちの刑」が、ローマの支配下にあつて禁じられていたことによるものでした。もしも、イエスさまが彼らの問いに答えて、「この女を赦し、石打ちの刑にはならない」と言えば、ローマの支配に不満を抱いていた彼らは、「イエスは異邦人であるローマの支配に加担し、古来からのユダヤの律法を無視する人だ」と、宣伝し、ユダヤ人たちの反感を煽る魂胆であったと思います。また逆に、もしイエスが、「ユダヤの律法に忠実に従って、この女を石打ちの刑に処してもよい」と言ったなら、彼らはローマの官憲に「イエスはローマの支配に従わない反逆者だ」と訴え、ローマ政府の手で、処罰してもらうことが出来る、と画策したのです。

人間の「知恵」というものは、それをを用いる人の用い方によって、人を生かすことにも殺すことにも、良いことにも悪いことにも用いられる「もろ刃のつるぎ」のようなものだと思います。この律法学者、ファリサイ派の人たちの問いは、イエスさまにとって、どちらに答えても、自分の立場を不利に陥れる絶妙な「罠」であったのです。

イエスさまは、それに対してどう答えたのでしょうか？ 6節の後半を見ると、「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた」と記されています。イエスさまは、一体地面に何を書かれたのでしょうか？ これは人によって色々推測されています。ある註解者は「愛・アガペー」という文字ではないかと言い、ある註解者は、「何か聖書の言葉だ」と言い、またある人は「律法学者やファリサイ派の人々の犯している数々の罪だ」と言います。聖書には何も書いてありませんから、推測は自由なのですが、私はまず、イエスさまがここで何も答えずに、しゃがみ込み沈黙されたこと自体に、深い意味があるように思います。

人の悪意ある企みに対して、言葉で応酬することは、かえって相手の罠にはまる結果になったり、逆に、相手の敵意や憎しみを増幅させ、お互いの関係をさらに悪化させてしまう場合があります。相手の問いかけに対して、言葉でうまく対抗出来ない場合、議論に負けたような気持になり、腹立たしく思うようなことがあるかもしれません。しかし、感情的に反発して、多くの思慮にかけた言葉を語るより、沈黙することの方が

正しい場合があるのです。沈黙が、相手の非を正し、反省を促し、真理を証しすることがあるのです。沈黙が雄弁に語るのです。十字架に向かわれた主は、「屠り場に引かれ行く小羊のように黙して、口を開かなかつた」と表現されています。イエスさまの沈黙は、イエスを陥れようとする人々の良心に、多くのことを語り掛けていたに違いありません。イエスさまは、黙したまま、かがみ込み、指で地面に何かを書き始められました。おそらく人々の視線は、そのイエスさまの一本の指に集められたのではないかと思います。それまで、この姦淫の場で捕らえられた女性に向けられていた人々の冷たい刺すような視線、興味本位に女に向けられていた男たちの視線が、一斉にイエスさまの一本の指に集められたのではないのでしょうか。「何を書いているのか？」と。

私は、神学生のころ、1年間下谷教会で、菊池吉弥牧師の下で、お世話になったことがあります。(その頃小池与之助先生も神学生で一緒でした)。ある礼拝の中で菊池先生は、この「姦淫の女」の箇所を取り上げて、次のようなことを話されました。

「自分が高校生の頃、母親は大鰐温泉の飲み屋の女将をしていて、毎晩、飲みに来た男の客の相手をして、酒に酔って戯れていた。自分はそんな母の姿を見るのが嫌で、家に帰らず、夜の街をぶらぶらしていた。そんなある夜、基督教の路傍伝道をしている人がいて、電柱の影に隠れてそっと立ち聞きをした。その説教者は、ヨハネ福音書のこの「姦淫の女」の話をしていたのです。姦淫の現場で捕らえられ女が、みんなの前に引きずり出されたその場面に、思わず“これは私の母だ”と思った。そして周りのみんなから責め立てられ、白い目で見られているこの女の居たたまれないような気持ちは、今の自分の思いだと感じたのです。母親は自分を学校へ行かせるために、飲み屋の女将をしていたが、学校では友達から冷やかされ、街では皆から白い目で見られていた。そんな自分にとって、その女の、居たたまれない気持ちが、痛いほど伝わって来た。

『この女に石を投げつけるべきかどうか』と問う学者たちの問いに、イエスはどうか答えるか、はらはらして聞いていると、『イエスは何も答えずに、かがみ込んで、地面に何かを書き始められた』。それを聞いた途端、自分は“この人は、話せる!”と思った。イエスは、自分の指を動かすことによって、みんなの冷たい刺すような視線を自分の一本の指に集めたのだ。この女の人は、つかの間ではあったかもしれないが、人々の視線から解放され、ふっと一息つくことが出来たのではないか! このイエスという方のさりげない優しさに心が熱くなるのを感じ、この人のことをもっと知りたいと思うようになった」。これが、菊池先生が教会に通い、イエス・キリストと出会うきっかけになった、というのです。55年も前に聞いたこの説教を私は未だに忘れることが出来ません。

私は、この菊池牧師の説教から、律法学者たちの、人の罪を指摘する人差し指と、イ

